

沿岸域における陸域－海域相互作用研究計画（LOICZ）と日本の沿岸環境問題

Land-Ocean Interactions in the Coastal Zone (LOICZ) and coastal environmental problem in Japan

山室 真澄^{1*}

Masumi Yamamuro^{1*}

¹東京大学大学院新領域創成科学研究科

¹The University of Tokyo

「沿岸域における陸域－海域相互作用研究計画」(LOICZ: Land-Ocean Interactions in the Coastal Zone) は、「地球圏－生物圏国際共同研究計画 (IGBP: International Geosphere-Biosphere Programme)」と「地球環境変化の人間社会側面に関する国際研究計画 (IHDP: International Human Dimensions Programme on Global Environmental Change)」のコアプロジェクトの一つである。1993年以来、沿岸域の生物学、化学、物理学における変動を研究する世界各地の科学者が参加している。2003年からは研究領域を社会、政治、経済に広げ、その結果、沿岸域における人為的な側面も研究対象とするようになった。

LOICZの目的は、沿岸環境の変化をもたらす地球規模の環境変動や人間による影響などについて、沿岸域に関わる人々が評価し、予知し、対応するために必要となる知識・理解・予測等を提供することである。このためLOICZは、沿岸域での地球環境の変化に関わる科学者だけでなく、政策立案者、マネージャー、および利害関係者への成果の普及に努めている。

日本はLOICZの科学委員会に継続して参加し、国内の沿岸海洋研究とLOICZとの提携も複数行われてきた。しかし親プロジェクトがIGBPだけでなくIHDPが加わって以降も、日本国内ではIGBPに関わる分野の研究者のみがLOICZに関わってきた。沿岸域は海洋の中で人間の影響が最も顕著で、そのガバナンスのあり方が環境の持続可能な利用を維持する上で極めて重要である。さらには海岸の漂着ゴミ問題など、周囲を海で囲まれた日本においては特に、国際的な管理システムの構築が求められているところである。このような現実を踏まえ、日本においても沿岸域研究の自然科学・社会科学の統合を図り、日本の研究を世界に発信する意義は大きい。

本講演では2010年3月に開催されたLOICZ科学委員会での議論の内容を紹介する。また国内の沿岸域における陸域－海域相互作用の研究や問題解決に関わっている学協会、財団、NGOなどの活動も紹介することを通じて、現在の日本の沿岸域において、陸域における人為的活動が多様かつ深刻な影響を与えている実態を説明する。